

デューイ『経験と自然』

「存在の一般的特徴としての形而上学」と哲学は批判である」というテーゼ

長谷 瑞光

デューイの『経験と自然』には、私見では主に二つの重要な課題がある。一つは、特に第二章に以降から顕在化される、「存在の一般的特徴((generic traits of existence)」の形而上学的分析である。そしてもう一つは、特に最終章(第十章)における「哲学は批判である」というテーゼの下での、経験において把持される存在の価値の分析である。

「存在の一般的特徴」と「哲学は批判である」という主張は、前者は「自然主義的形而上学」の主題として、後者は哲学の課題として、デューイの『経験と自然』に通底する大きな主題である。実際、正直なところ、デューイの論述はやや錯綜としていて、一体、この二つの主題がいかに関連しているのかが、必ずしも明晰な形で述べられているとはいえないであろう。実際、加賀裕郎はこの二つの主題の存在に気が付きつつも、それらの内容について明晰に定義したとはいえなかった<sup>\*i</sup>。ましてや他の内外の諸研究では、そもそも『経験と自然』にこうした主題が存在するという事実すら、自覚的に取り扱ってはこなかったようにすら思われるのである。

改訂された一九二九年の第一章で展開される「第一次経験」と「第二次経験」の対比と分析は、勿論、この「存在の一般的特徴」としての自然主義的形而上学と、「批判としての哲学」に通底する方法論的課題である。普通に考えると、そもそも「第一次経験」と「第二次経験」の対比の中には、「価値」の問題はあまり含まれていないように思われるかもしれない。ところが、第一章の後半で論じられる「選択」(choice)では、椅子の認識の例が挙げられるけれども、我々は「選択」に際して、ハイデガーの用語を借りるならば、「椅子」をまさに「道

具的存在者」として扱っているのである。椅子の意味は、単なる「風景」の断片ではなく、我々にとって椅子という存在が何者なのかという、いわば存在論的な「価値」の論点が入り込んでいるということを見逃してはならないのである<sup>\*ii</sup>。

この論点に加えて、さらに我々は『経験と自然』第五章で論じられたような、銃撃事件の訴追がどの州の「法」で裁かれるべきかという問いをデューイが提起していることは重要である。これはつまり、「法」というものが、形而上学的に扱われるべきものなのかという、カント哲学の用語法をも意識した問いであるように思われる。『経験と自然』前年の論文<sup>\*iii</sup>では、オリバー・ウエンデルス・ホームズの哲学が論じられていた。そしてここでのホームズの議論は、価値を巡る問題を主に議論する『経験と自然』第十章でも主題的に議論されていることは見逃されてはならないであろう。

さて最初にも述べた「哲学は批判である」ということが、主題的に論じられる第十章では、やはりカント哲学がその背後に意識されているのであろうということは、この章に頻出する「批判」(judgement)や「taste」(趣味)などのような言葉からも、比較的容易に類推できるであろう。無論、ここで私は、カント哲学の問題設定である、「理論理性」と「実践理性」の対比とか、「自律」(Autonomie)と道徳などの「法則」(Gesetz)の対比を論じたい訳ではない。そうではなくて、デューイの扱っている問題は、カント哲学が峻別した純粋理性の領域と実践理性の領域を止揚するという、ある意味でのヘーゲル的課題であるということを確認することである。すなわちこのような課題が『経験と自然』でも相変わらず意識されているということ、このことに焦点を与えたいのである。つまりこのような初期デューイ以来の問題意識が、依然として、『経験と自然』のような著述に通底している筈なのに、それにも関わらず、この重要な視点を、ともすれば我々は『経験と自然』という著述の解釈において忘却してきたのではないかとというのが、本発表の問題的である。

\*i加賀裕郎『デューイ自然主義の生成と構造』晃洋書房、二〇〇九年、二四七頁などを参照。加賀の研究はこの問題に関しての多くの先行研究を纏め上げていて、さらに多くの鋭い分析を提示して示唆に富む。特に『経験と自然』においては、ボイスバードの解釈に抗しつつ、デューイの形而上学には、民主主義的側面についての理解が含まれるという加賀の指摘は大変に重要である。しかし管見の限り、『経験と自然』という著作では、基本的に「民主主義(democracy)」という言葉自体は、鍵概念としては、全体の趣旨としてはともかく、その言葉自体としては殆ど使用されていないようにも見える。そ

こで本稿では、その代わりにここでデューイが使用している「法」という言葉に着目したのである。

\*ii この「選択」(choice)という概念は管見の限りでは、デューイ中期のベルクソンを扱った論文、Perception and Organic Action, (1912), MW.vol. 7 (以下の注記では全集版の頁や巻数は特に必要のないと判断できる場合は紙数削減のために略す)でも鍵概念として使用されている。

\*iii Logical Method and Law, (1924) MW.vol.14, pp. 65-77.